岩波文庫

2345—2347

漱石小品集

夏目漱石著

岩波書店

昭和十五年六月十日印刷
昭和十五年六月十八日發行
昭和十五年十一月十五日第二刷發行

漱石小品集 ★★★

定價六十錢 (税)

著者 夏目漱石

發行者 東京市神田區一ツ橋二丁目三番地 岩波茂雄

印刷者 東京市神田區錦町三丁目十一番地 白井赫太郎

精興社印刷

岩波文庫
2345-2347

發行所 東京市神田區一ツ橋二丁目三番地 岩波書店
電話 (一八七)〇〇一一番 (一八九)〇〇一一番 (一〇二二番 小賣部專用)
九段一〇二二番
振替口座東京二六二四〇番

小店出版物中、萬一不完全な品（落丁・亂丁等）がありました節は、御手數乍ら洩れなく御申出下さる事を御願ひ致します。たとへ御讀後でありましても早速お取替致します。

（板倉製本）

岩波文庫
2345—2347

夏目漱石著作集

岩波書店

目次

京に着ける夕……七
文鳥……一四
夢十夜……二三
永日小品……二六
元日……二六
蛇……二五
泥棒……二七
柿……二七
火鉢……二六
下宿……八〇
過去の匂ひ……八二
猫の墓……八七
暖かい夢……九一
印象……九四
人間……九七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山鳥……一〇〇
モナリサ……一〇五
火事……一〇七
霧……一一〇
懸物……一一三
紀元節……一一五
儲口……一一六
行列……一一九
昔……一二一
聲……一二三
金……一二六
心……一二八
變化……一二一
クレイグ先生……一二四
長谷川君と余……一二四
滿韓ところ〴〵……一五一
子規の畫……一六八
ケーベル先生……一七一

變な音……二六
手紙……二八
三山居士……二〇一
初秋の一日……二〇六
ケーベル先生の告別……二〇九
戰爭から來た行違ひ……二一一
解　説（小宮豐隆）……二一三

京に着ける夕

汽車は流星の疾きに、二百里の春を貫いて、行くわれを七條のプラットフォームの上に振り落す。余が踵の堅き叩きに薄寒く響いたとき、黑きものは、黑き咽喉から火の粉をぱつと吐いて、暗い國へ轟と去つた。

唯さへ京は淋しい所である。原に眞葛、川に加茂、山に比叡と愛宕と鞍馬、ことごとく昔の儘の原と川と山である。昔の儘の原と川と山の間にある、一條、二條、三條をつくして、九條に至つても十條に至つても、皆昔の儘である。數へて百條に至り、生きて千年に至るとも京は依然として淋しからう。此の淋しい京を、春寒の宵に、疾く走る汽車から會釋なく振り落された余は、淋しいながら、寒いながら通らねばならぬ。南から北へ——町が盡きて、家が盡きて、燈が盡きる北の果迄通らねばならぬ。

「遠いよ」と主人が後から云ふ。「遠いぜ」と居士が前から云ふ。余は中の車に乘つて顫へてゐる。東京を立つ時は日本にこんな寒い所があるとは思はなかつた。昨日迄は擦れ合ふ身體から火花が出て、むく〳〵と血管を無理に越す熱き血が、汗を吹いて總身に煮浸み出はせぬかと感じた。東京は左程に烈しい所である。此の刺激の强い都を去つて、突然と太古の京へ飛び下りた余

は、恰も三伏の日に照り附けられた燒石が、綠の底に空を映さぬ暗い池へ、落ち込んだ樣なものだ。余はしゆつと云ふ音と共に、倏忽とわれを去る熱氣が、靜なる京の夜に震動を起しはせぬかと心配した。

「遠いよ」と云つた人の車と、「遠いぜ」と云つた人の車と、顫へて居る余の車は長き轅を長く連ねて、狹く細い路を北へ北へと行く。靜かな夜を、聞かざるかと輪を鳴らして行く。鳴る音は狹き路を左右に遮られて、高く空に響く。かんからゝん、かんからゝん、と云ふ。石に逢へばかかん、かゝらんと云ふ。陰氣な音ではない。然し寒い響である。風は北から吹く。

細い路を窮屈に兩側から仕切る家は悉く黑い。戸は殘りなく鎖されてゐる。所々の軒下に大きな小田原提燈が見える。赤くぜんざいとかいてある。人氣のない軒下にぜんざいは抑も何を待ちつゝ赤く染まつて居るのかしらん。春寒の夜を深み、加茂川の水さへ死ぬ頃を見計らつて桓武天皇の亡魂でも食ひに來る氣かも知れぬ。

桓武天皇の御宇に、ぜんざいが軒下に赤く染め拔かれてゐたかは、わかり易からぬ歷史上の疑問である。然し赤いぜんざいと京都とは到底離されない。離されない以上は千年の歷史を有する京都に千年の歷史を有するぜんざいが無くてはならぬ。ぜんざいを召し給へる桓武天皇の昔はしらず、余とぜんざいと京都とは有史以前から深い因緣で互に結びつけられて居る。始めて京都に來たのは十五六年の昔である。その時は正岡子規と一所であつた。麩屋町の柊屋とか云ふ家へ着

いて、子規と共に京都の夜を見物に出たとき、始めて余の目に映つたのは、此の赤いぜんざいの大提燈である。此の大提燈を見て、余は何故か是れが京都だなと感じたぎり、明治四十年の今日に至る迄決して動かない。ぜんざいは京都で、京都はぜんざいであるとは余が當時に受けた第一印象で又最後の印象である。子規は死んだ。余はいまだに、ぜんざいを食つた事がない。實はぜんざいの何物たるかをさへ辨へぬ。汁粉であるか煮小豆であるか眼前に髣髴する材料もないのに、あの赤い下品な肉太な字を見ると、京都を稲妻の迅かなる閃きのうちに思ひ出す。同時に――ああ子規は死んで仕舞つた。絲瓜の如く干枯びて死んで仕舞つた。――提燈は未だに暗い軒下にぶらぶらしてゐる。余は寒い首を縮めて京都を南から北へ抜ける。

車はかんからゝんに桓武天皇の亡魂を驚かし奉つて、しきりに馳ける。前なる居士は默つて乘つて居る。後なる主人も言葉をかける氣色がない。車夫は只細長い通りを何處迄もかんからゝんと北へ走る。成程遠い。遠い程風に當らねばならぬ。馳ける程顫へねばならぬ。余の膝掛と洋傘とは余が汽車から振り落されたとき居士が拾つて仕舞つた。洋傘は拾はれても雨が降らねば入らぬ。此の寒いのに膝掛を拾はれては東京を出るとき二十二圓五十錢を奮發した甲斐がない。

子規と來たときは斯樣に寒くはなかつた。子規はセル、余はフランネルの制服を着て得意に人通りの多い所を歩行いた事を記憶してゐる。其の時子規はどこからか夏蜜柑を買うて來て、之を一つ食へと云つて余に渡した。余は夏蜜柑の皮を剝いて、一房毎に裂いては嚙み、裂いては嚙ん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

で、あてどもなくさまようて居ると、いつの間にやら幅一間位の小路に出た。此の小路の左右に竝ぶ家には門並方一尺許りの穴を戸にあけてある。さうして其の穴の中から、もし〳〵と云ふ聲がする。始めは偶然だと思うてゐたが行く程に、穴のある程に、申し合せた樣に、左右の穴からもし〳〵と云ふ。知らぬ顏をして行き過ぎると穴から手を出して捕まへさうに烈しい呼び方をする。子規を顧みて何だと聞くと妓樓だと答へた。余は夏蜜柑を食ひながら、目分量で一間幅の道路を中央から等分して、其の等分した線の上を、綱渡りをする氣分で、不偏不黨に練つて行つた。穴から手を出して制服の尻でも捕まへられては容易ならんと思つたからである。子規は笑つて居た。膝掛をとられて顫へてゐる今の余を見たら、子規は又笑ふであらう。然し死んだものは笑ひたくても、顫へてゐるものは笑はれたくても、相談にはならん。

かんからゝんは長い橋の袂を左へ切れて長い橋を一つ渡つて、ほのかに見える白い河原を越えて、藁葺とも思はれる不揃な家の間を通り抜けて、梶棒を横に切つたと思つたら、四抱か五抱もある大樹の幾本となく提燈の火にうつる鼻先で、ぴたりと留まつた。寒い町を通り抜けて、よく寒い所へ來たのである。遙なる頭の上に見上げる空は、枝の爲に遮られて、手の平程の奥に料峭たる星の影がきらりと光を放つた時、余は車を降りながら、元來何處へ寢るのだらうと考へた。

「是れが加茂の森だ」と主人が云ふ。「加茂の森がわれ〳〵の庭だ」と居士が云ふ。大樹を繞

ぐつて、逆に戻ると玄關に燈が見える。成程家があるなと氣がついた。

玄關に待つ野明さんは坊主頭である。臺所から首を出した爺さんも坊主頭である。主人は哲學者である。居士は洪川和尚の會下である。さうして家は森の中にある。後は竹藪である。顫へながら飛び込んだ客は寒がりである。

子規と來て、ぜんざいと京都を同じものと思つたのはもう十五六年の昔になる。夏の夜の月圓きに乘じて、淸水の堂を徘徊して、明かならぬ夜の色をゆかしきものゝ樣に、遠く眼を微茫の底に放つて、幾點の紅燈に夢の如く柔かなる空想を縱まゝに醉はしめたるは、制服の釦を眞鍮と知りつゝも、黃金と强ひたる時代である。眞鍮は眞鍮と悟つたとき、われ等は制服を捨てゝ赤裸の儘世の中へ飛び出した。子規は血を嘔いて新聞屋となる、余は尻を端折つて西國へ出奔する。御互の世は御互に物騷になつた。物騷の極子規はとう〳〵骨になつた。其の骨も今は腐れつゝある。子規の骨が腐れつゝある今日に至つて、よもや、漱石が教師をやめて新聞屋にならうとは思はなかつたらう。漱石が教師をやめて、寒い京都へ遊びに來たと聞いたら、圓山へ登つた時を思ひ出しはせぬかと云ふだらう。新聞屋になつて、糺の森の奥に、哲學者と、禪居士と、若い坊主頭と、古い坊主頭と、一所に、ひつそり閑と暮して居ると聞いたら、それはと驚くだらう。矢つ張り氣取つてゐるんだと冷笑するかも知れぬ。子規は冷笑が好きな男であつた。

若い坊さんが「御湯に御這入り」と云ふ。主人と居士は余が顫へてゐるのを見兼ねて「公、ま

づ這入れ」と云ふ。加茂の水の透き徹るなかに全身を浸けたときは齒の根が合はぬ位であつた。湯に入つて顫へたものは古往今來澤山あるまいと思ふ。湯から出たら「公先づ眠れ」と云ふ。若い坊さんが厚い蒲團を十二疊の部屋に擔ぎ込む。「郡内か」と聞いたら「太織」だと答へた。「公の爲に新調したのだ」と說明がある上は安心して、わがものと心得て、差支なしと考へた故、御免を蒙つて寢る。

寢心地は頗る嬉しかつたが、上に掛ける二枚も、下へ敷く二枚も、悉く蒲團なので肩のあたりへ紙の森の風がひやり〳〵と吹いて來る。車に寒く、湯に寒く、果は蒲團に迄寒かつたのは心得ぬ。京都では袖のある夜着はつくらぬものゝ由を主人から承つて、京都はよく〳〵人を寒がらせる所だと思ふ。

眞夜中頃に、枕頭の違棚に据ゑてある、四角の紫檀製の枠に嵌め込まれた十八世紀の置時計が、チーンと銀椀を象牙の箸で打つ樣な音を立てゝ鳴つた。夢のうちに此の響を聞いて、はつと眼を醒ましたら、時計はとくに鳴り已んだが、頭のなかはまだ鳴つてゐる。しかも其の鳴りかたが、次第に遠く、次第に濃かに、耳から、耳の奥へ、耳の奥から、腦のなかへ、腦のなかから、心の底へ浸み渡つて、心の底から、心のつながる所で、しかも心の尾いて行く事の出來ぬ、遐かな國へ拔け出して行く樣に思はれた。此涼しき鈴の音が、わが肉體を貫いて、わが心を透して無[illegible]の幽境に赴くからは、身も魂も氷盤の如く清く、雪甌の如く冷かでなくてはならぬ。

太織の夜具のなかなる余は愈寒かつた。

曉は高い櫸の梢に鳴く烏で再度の夢を破られた。此の烏はかあとは鳴かぬ。きやけえ、くうと曲折して鳴く。單純なる烏ではない。への字烏、くの字烏である。加茂の明神がかく鳴かしめて、うき我れをいとゞ寒がらしめ玉ふの神意かも知れぬ。

かくして太織の蒲團を離れたる余は、顫へつゝ窓を開けば、依稀たる細雨は、濃かに糺の森を罩めて、糺の森はわが家を遶りて、わが家の寂然たる十二疊は、われを封じて、余は幾重ともなく寒いものに取り圍まれてゐた。

春寒の社頭に鶴を夢みけり

文　鳥

十月早稻田に移る。伽藍の樣な書齋に只一人、片附けた顏を頰杖で支へて居ると、三重吉が來て、鳥を御飼ひなさいと云ふ。飼つてもいゝと答へた。然し念の爲だから、何を飼ふのかねと聞いたら、文鳥ですと云ふ返事であつた。

文鳥は三重吉の小說に出て來る位だから奇麗な鳥に違なからうと思つて、ぢや買つて呉れ玉へと賴んだ。所が三重吉は是非御飼ひなさいと、同じ樣な事を繰り返してゐる。うむ買ふよ〳〵と矢張り頰杖を突いた儘で、むにや〳〵云つてるうちに三重吉は默つて仕舞つた。大方頰杖に愛想を盡かしたんだらうと、此時始めて氣が附いた。

すると三分ばかりして、今度は籠を御買ひなさいと云ひだした。是れも宜しいと答へると、是非御買ひなさいと念を押す代りに、鳥籠の講釋を始めた。其の講釋は大分込み入つたものであつたが、氣の毒な事に、みんな忘れて仕舞つた。只好いのは二十圓位すると云ふ段になつて、急にそんな高價のでなくつても善からうと云つて置いた。三重吉はにや〳〵して居る。

夫から全體何所で買ふのかと聞いて見ると、なに何所の鳥屋にでもありますと、實に平凡な答をした。籠はと聞き返すと、籠ですか、籠はその何ですよ、なに何所にかあるでせう、と丸で雲

を攫む樣な寛大な事を云ふ。でも君あてがなくつちや不可なからうと、恰も不可ない樣な顏をして見せたら、三重吉は頰ぺたへ手を宛てゝ、何でも駒込に籠の名人があるさうですが、年寄ださうですから、もう死んだかも知れませんと、非常に心細くなつて仕舞つた。

何しろ言ひだしたものに責任を負はせるのは當然の事だから、早速萬事を三重吉に依賴する事にした。すると、すぐ金を出せと云ふ。金は慥に出した。三重吉はどこで買つたか、七子の三つ折の紙入を懷中してゐて、人の金でも自分の金でも悉皆此の紙入の中に入れる癖がある。自分は三重吉が五圓札を慥に此の紙入の底へ押し込んだのを目擊した。

斯樣にして金は慥に三重吉の手に落ちた。然し鳥と籠とは容易にやつて來ない。

其のうち秋が小春になつた。三重吉は度々來る。よく女の話などをして歸つて行く。文鳥と籠の講釋は全く出ない。硝子戸を透して五尺の緣側には日が好く當る。どうせ文鳥を飼ふなら、こんな暖かい季節に、此の緣側へ鳥籠を据ゑてやつたら、文鳥も定めし鳴き善からうと思ふ位であつた。

三重吉の小說によると、文鳥は千代々々と鳴くさうである。其の鳴き聲が大分氣に入つたと見えて、三重吉は千代々々を何度となく使つてゐる。或は千代と云ふ女に惚れて居た事があるのかも知れない。然し當人は一向そんな事を云はない。自分も聞いて見ない。只緣側に日が善く當る。さうして文鳥が鳴かない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com